

特集「東南アジア低地開拓史」

—東南アジアにおける低地開発の諸相—

低地開拓史の視点

坪 内 良 博*

東南アジアの地図を眺めると低地平野の占める面積がきわめて大きいことが知られる。それらの巨大なものは、大陸部ではイラワジ、チャオプラヤ、メコン、紅河などの大河のデルタ部に、島嶼部ではスマトラ島東海岸、ボルネオ島北海岸（サラワク）および西海岸・北海岸（カリマンタン）、ニューギニア島南海岸などに存在する。これらの低地の開発は、高地部に比較して相対的に新しい時期に着手された。現在では一面水田におおわれている地域も多いが、いまなお湿地林の姿を保っている面積も膨大である。

東南アジア諸地域の巨大低地が主として川筋を利用しながら点として開発・居住されたのはかなり古い時期にさかのぼることができる。この意味で大規模開発前の低地が全く利用されぬ無人の土地であったと想定することは誤りであろう。点としての低地居住は二つのタイプに分けられる。その1は交易ポストであり、海と既に開発の進んだ内陸とを結ぶ地点に立地し、小規模ながらかなりの数にのぼったと考えられる。これらの一部は他の小基地の機能を奪いつつ、現在の首都ないし港湾都市へと発展する。その2は農業的あるいは

は採集的利用であるが、これらにともなう農業生産の形態はおそらく移動傾向の強い低地焼畑に類するものではなかったかと思われる。これらの集落は交易ポストに米を供給する役割を果たしたかもしれない。しかし、交易ポストの人口を支えるべき食糧のどれだけの割合がこれらの低地農業から補給されたかは不明であり、また低地農業を営むすべての集落が交易ポストに食糧を供給したかどうかとも疑問である。これらの開発初期における低地のコミュニティの性格は多分に部族社会的様相を有していたと思われ、生産・自治組織がコミュニティを基礎とせず村落組織が不明瞭な場合さえ生じる開発後期の状況とは多分に異なっていたと思われる。

低地が面として利用されるようになった年代は東南アジアの各地域によって異なり、同地域の中でも地形による小区分ごとに開発時期が異なり、さらにこれらの小区分の内部では微地形に応じて利用のおよぶ時期が異なる。開発年代の差に従って大別すれば東南アジアには三つのグループがある。最も早期にデルタ開拓が進むのはベトナムの紅河デルタで、1840年ごろには全面的な開発が完了する。大陸部の他の三つの主要デルタの大開発

* 京都大学東南アジア研究センター

が始まるのは19世紀後半以降のことである。これに対して、島嶼部の低地はごく最近まで大規模開発の対象とはならなかった。島嶼部中では地理的にも大陸部に近いマレー半島のケダー・プルリス平野で19世紀から今世紀初頭に運河の開鑿が行われて穀倉地帯が誕生した例などはそのわずかな例外の一つである。スマトラやボルネオの低湿地では土着の居住者によって、低地焼畑ないし減水期稲作に類する耕作法が、徐々にその面積を拡大しつつも未耕の森林を多く残した状況で営まれてきたが、ようやくこの10年ほどの間に外島移民計画が大幅に進められてジャワ人を主力とする開拓村が現われるようになった。

東南アジアの低地開発の実現に関与したと考えられる要因としては以下のごときものが挙げられる。第1は適地ないし技術の問題、第2は農産物需要の問題、第3は開発の担い手たるべき人口および資本の問題である。

第1の適地・技術については、低地の規模、地形区分、土壌組成、農耕機具、土木技術などが考慮されねばならない。たとえば紅河デルタの開発が比較的早期に行われたのは、このデルタの規模が大陸部の他の3大デルタに比して相対的に小さく、コントロールが容易であったことと無関係ではないであろう。デルタ低地が低地焼畑を脱して面として利用されるためには犁耕の果たした役割も重要である。低湿地の交通を確保し、さらに水コントロールの思想を実現するには土木技術の発達が不可欠であった。大陸部デルタと島嶼部海岸低地の土壌組成上の根本的な相違は前者が大河の運ぶ泥を主体としているのに対し、後者では泥炭の占める位置が大きいことであるが、このことも開発の難易に関係していると考えねばならない。

第2の農産物需要については、植民地時代以降の世界市場の形成の果たした役割が大きい。一方では錫鉱やプランテーション作物の

生産地に対する食糧の補給が必要となり、他方ではスエズ運河の開通を含む海運の発達に応じて市場圏が拡大する。イラワジ、チャオプラヤ、メコンの大陸部3大デルタ下流部の水田化が急激に進むのはこの時期である。島嶼部低地の開発が相対的に遅れるのは、既に述べた適地の問題とも関連して、開発がゴム、コーヒーなどの高地むきの樹木作物を中心として行われたためでもあろう。

第3の問題は、労働力、開発企業家、原居住地の生活条件ないし人口圧、さらには国家組織の問題へと広がる。低地にもともと居住していた人口の存在（たとえばイラワジデルタのペグー人）は無視できないが、彼らは歴史のある時点でその姿を消していったり、量的な重要性を失ったりするのであって、低地開発には移入人口が重要な役割を果たす。たとえばメコンデルタにおいては砂州上に伝統的に居住していたクメール人はデルタ開発には主導的な役割を果たさず、ベトナム人の移住が決定的な重要性をもつ。チャオプラヤデルタにおいては南方からのマレー人および内陸からのタイ人の移住がみられる。大陸部の3大デルタの開発に関与したのは植民地政府と企業家、あるいは土着政府と貴族層などであるが、彼らの役割および入植者との関係については各デルタ毎に論じられねばならない。大陸部デルタが内陸ないしは地つづきの他の個所にかかなりの人口ストックを有していたことは島嶼部における人口希薄性に対比される。島嶼部ではこの希薄性がとくにマレー半島を中心としてインドからの大量移民をまねき開発が樹木性の商品作物に集中されるのである。ジャワ島はその火山性の地形と土壌にめぐまれて島嶼部では例外的に大きな人口ストックを形成したが、この島からスマトラやボルネオにおいて卓越する低地部へと人口がかなり大量に移動するのは、第2次大戦後の人口過剰を背景として政府の外島移民計画

が実施されたきわめて最近の時期のことである。

東南アジアの低地開発は上述のような開拓年代の相違を含んでいる。少なくとも大陸部においては農業生産の主要舞台は稲作を中心として既に内陸から低地へと転換し、生活の場の転換が生じている。より不利な条件をもつ島嶼部低湿地においても、人口圧と開発技術の進歩は将来同様の変貌をもたらすかもしれない。大陸部デルタにおける従来の土地利用もより大規模な資本と現代技術の投入によってさらに大幅に変容するかもしれない。低地がフロンティアである状況は東南アジアでは今後も続き、開発過程の歴史的比較と将来設計とはともにこの地域の研究にとって重大な意義を有するのである。

本特集では東南アジア低地開発の諸相を4編の論稿によって示す。桜井由躬雄は10—11世紀に紅河デルタの自然堤防を中心とするコアエリアに展開していった村落発展史を史料を吟味しつつ地形図の上に載せて捉え、早期のデルタ開拓の様相を描写することを試みる。この時期におけるデルタ辺縁部に農業生産に依拠したというよりは交易ポストとしての機能に依拠したらしい土豪勢力の存在が認められることも、当時のデルタの構造を理解する上で興味深い。高谷好一はチャオプラヤデルタの歴史的発展を模式的に提示する。大規模開発前の下部デルタを交易ポストと低地焼畑タイプの稲作を営む農村のセットとして捉え、そこに交通路としての運河開鑿を利用した耕地の拡大が加わり、さらに後期に内陸型の土木工事による自然改造の原理がとり入れられる過程が描かれる。デルタの全面開拓はこの意味で内陸的思考法の海岸部への進出である。田辺繁治は同じチャオプラヤデルタのアユタヤ近辺の浮稲地帯におけるフィールドワークを通して、人為の水コントロールをほとんど行わない農村の姿を民族誌的な手法

で描き出す。ここでは水利を軸とする共同を欠く、低地特有の枠の弱いコミュニティにおける稲作が明らかにされる。統一国家の治安維持の実現以前に、コミュニティに課せられた自己防衛という機能を吟味することなしに、水利組織の欠如とコミュニティ結合の弛緩性を短絡させることはもちろん危険であるとしても、田辺の報告に現われた稲作コミュニティの性格は、民衆の共同とは無関係に政府・企業家による運河開鑿や水コントロールが行われるようになった下部デルタの移植田地帯にも共通するものを有している。

水田化、居住地化の進行に焦点をあてた以上の3論文に対して、サラワク低地を扱う福井捷朗は過去の開発の希薄性ないし遅速性に注目する。この土地では低地の居住史は上・中流部の陸稲焼畑と同様、耕地の移動ないし休耕をとまなう稲作によって支えられてきたが、土地利用の密度はたえず低く、稲作は自家消費に見合うかそれをわずかに上回る程度であった。福井はこのような島嶼部低地における開発の停滞の一因を泥炭性の土壌に見出そうとする。

本特集に収めた4編の論文は、低地開発の多様な側面をそれぞれ異なった手法で扱っており、互いに補完的であると同時に1編の論文から全体像を見通すことはほとんど不可能である。ここに低地開発史および低地開発計画の問題領域の巨大性があり、この拙劣な序文が必要とされる理由がある。低地を舞台として繰り広げられた開発を理解することは、東南アジアの過去から現在への歩みを捉えることであり、将来の低地開発を構想することはいままでもなく東南アジアの未来に連なっている。低地開発の研究はいかなるディシプリンの独占物でもない。それはまさに好個の学際的共同研究対象である。

本特集でこの対象にむかって打った網はきわめて目の荒いものである。むしろ網の大き

さを広げて低地開発の語意に含まれる最大の
範域を捉えようと考えた。さらに大きな網は
地球全体の低地をおおうであろうが、それは
いまのところわれわれの手に余る。やや密な
網はたとえば「東南アジア比較デルタ開発史」
のようにより限定された共通項の設定という
ことになろう。比較の舞台を隣接の中国にま
で広げれば、早期における大土木工事の敢行

とデルタの全面開拓を標榜する南中国の諸デ
ルタに、案外東南アジア型の開発モデルと同
様のパターンが再発見されるかもしれない。
このような目標は将来の精緻化の道程に組み
入れられている。とまれ、われわれは低地を
土台として東南アジアの変貌の理解に近づき
たいのである。